編集後記

「女性学」（ジェンダー・スタディーズ）とは何であり、それはどのような意味で学問として成立しうるのか。そんなことの正面からの議論を、会員以外の人たちと自由に行う場があってもいいかと思っています。「女性学は成立しない」というご意見もふくめて、例えば「女性学と私」のような特集があってもいいかなと。きっと面白くなります。あぶないですか？（I. Y.）

今回の特集は「異文化とジェンダー」。学生時代の私には、「異文化＝外国の文化」、「ジェンダー＝性差」といった程度の理解しかなかっただろう。当時の私は、そうした理解をしている「自分」の存在をまったく疑っていなかったのである。考えてみれば、「異文化」も「ジェンダー」も、自分ならざるもの（自分が意識できないもの）に触れるセンサーのはたらきを活発にして、確固たる「自分」にゆさぶりをかけるための言語の装置だったというのに。私に欠けていたのは、「他者」の知識ではなく、「他者」へのやさしさである。（N. K.）

今年度は残念ながら学生懸賞論文の該当者がいなかった。女性学のようにイデオロギーがかった(？)学問のばあい（実証の重みでひとをうならせるというよりもむしろ）現実にどう切り込み、どうフレームを組み立てるかで勝負が決まってくるわけだから、ああまたこの手の論じ方かといったものではなく、もっと斬新で奇抜なものを書いてほしい。（S. T.）

他大学の女子大学院生と一緒に研究する機会が多いのですが、男子は簡単に決まるのに、成績トップでも女子はなかなか就職が決まらないという経験を数年間してきました。まだ「ジェンダー」の問題は根強くあるようです。ただ私としては、その現実に背を向けて問題を探るよりも、その現実を超える力を身につける指導力をつけ、壁を越えていきたい感じています。それゆえ少し、ジェンダーから離れて女性教育を考えていこうと思います。２年間編集に携れ、とてもよい勉強をさせて頂いたことを最後に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。（S. N.）

今年度の特集は、「異文化とジェンダー」です。このテーマにご関心のある先生方に御投稿いただけて、喜ばしく思います。

また、今年度は新たに講演報告と新刊紹介のページも設けました。

編集委員の先生方、一年間お疲れさまでした。留任される方は、来年度もよろしくお願いいたします。（T. T.）